星磨きと博物館

たいらひろし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
星磨きと博物館

【Ｎコード】
Ｎ８３８２Ｙ

【作者名】
たいらひろし

【あらすじ】
短編のファンタジー童話です。さくっと気軽に読めます。ｐｉｘｉｖの小説サイドに掲載しているものを転載いたしました。

きらめく夜空のてっぺんにある星をグリセン布で磨(みが)くと、すぐにその星は元の白い瞬(まばた)きを取り戻した。空へ返してあげると、すぐさま息を吹き返したようにきらきらと輝き始める。

僕は汗をぬぐってハシゴから降りる。ひとつのお星さまを磨きあげるのに一時間はかかるから、一苦労だ。まあ、一度磨きあげてさえしまえば、もう数十年はその煌(きら)めきを失わないからいいのだけれど。

僕の仕事は、こうして世界を照らす星を磨いて周ることだ。周るとはいっても、僕が暮らすこの『星降る丘』の頂上で待っていれば、おのずと星々は宇宙の回転に合わせて、こちらへやってくるのだけれど。

「ふう、と」

僕は腕の筋肉をほぐしながら、ハシゴの上で世界を見渡した。ここからなら遥か地平線の果てまで見わたせる。瑪瑙色(めのういろ)の海では悪い海賊たちと空飛ぶ元気な子供たちが戦っている。西のジャングルでは巨大なゴリラが大きないびきをかいているし、東では小人たちが楽しげに歌を歌っているのが見える。

僕は、なんだかうずうずした。星磨きの仕事をいまいち面白くないと思っている僕にとって、その世界はロマンに満ち溢れたものにしか見えない。

僕は、どうしてこの仕事をしているのだろうと思う。こうして毎日、だれにも知られないで星を磨いているよりも、海賊と戦ったり、どこか未知の世界へ冒険に出かけたほうが、よっぽど楽しそうじゃないか。

「たまには、休んでもいいかなぁ」

そう思いついた僕は、今日の仕事を切りあげて遊びにいくことにした。

星降る丘から銀色のトロッコにのってしばらく走ったところに、その博物館はある。
世界中の……ううん、ここと違う、別の世界の品物まで展示している、とても大きな博物館だ。
仕事に疲れたときや、ふっとどこかへ出かけたくなったときに、僕はよくその博物館へ遊びにいくことにしている。
銀色のトロッコはゆったりとした速度で夜の丘をくだっていく。途中、虹色に光るトカゲや楽しげに歌を歌う小人たちとすれ違った。小人たち――彼らも僕と同様に、この丘で思い思いの仕事についているはずだ。彼らの歌をきいていると、なんだか幸せな、楽しい気分になる。彼らは……なんの仕事をしているんだろう？
やがてトロッコのスピードがおち、博物館の巨大な扉が目前に迫ってきた。鈍色（にびいろ）の光沢をまとう壮観な造りは、まるで小さなお城のようだ。
ノックしておうかがいをたてると、なかから「どうぞ」という間延びした声が返ってきた。館長さんだ。たびたび訪れるため、僕はここの館長さんと面識がある。
泥だらけの靴のまま上がることにすこしだけ罪悪感を覚えながら、僕は博物館のなかへと足を踏み入れた。
闇に覆（おお）われた館内が一瞬にして、おぼろげな灯りに照らし出される。これは人工蛍の光だろうか。
相変わらず、館内はだだっ広かった。紺色のカーペットの敷き詰められたエントランスルームにはシャンデリアが装飾され、あちこちにパンフレットやガラスケースに封じ込められた地図などがある。まるでここがひとつの世界のようだ。
「やあ、よくいらしてくれました」
真っ白いスポットライトの向こうからよちよちと歩いてきたのは、ペンギンのぬいぐるみだった。シルクハットをかぶった彼――ある

いは彼女――は、樫(かし)のステッキをふりふり、にこやかにあいさつしてくれた。
「最近はここを訪れるひとも少なくて。まあ、しばらくしたらまた増えるのでしょうけれどね。ほっほっほ」
彼の柔和な笑顔は、きっとだれの心にも警戒心など抱かせないだろう。
「さあ、じゃあさっそく中をご案内しましょうか」
ぺたぺたと音をたてて歩く彼の後ろについていくことにする。博物館のなかは新鮮な漆喰(しっくい)の香りで満ちており、とても築何百年もたっている建築物だとは思えない。大理石の壁も、まっさらなカーテンも、どれもこれもが僕の冒険心をかきたててくれる。
「古い建物にしてはきれいすぎる、とお考えですか？」
彼は僕の心を読んだかのようにいった。
「これはね。妖精たちが毎日きれいにしてくれているのですよ。この博物館は、いまでこそ人足こそしばらく絶えておりますが、彼女らは文句ひとついわず、自分のなすべきことをきっちりとこなしてくれる。ささ、先へいきますよ」
ペンギン館長さんの表情は誇らしげであった。
初めの部屋を訪れると、そこには巨大なガラスケースがあった。ケースのなかには大きな時計がかざられている。いったいいつの時代のものだろう。どこもかしこも錆びていて、長針も短針も曲がっているのに、なのにまだ元気に動いている。ちくたく、ちくたく。
「これはね。どこかの世界で造られた時計です」
どこの、とはきかなかった。きっと館長さんも知らないのだろうから。
「たいしたものですね。製造年月日がすでに世紀単位で過去だというのに、まだ活動を止めない。わたしもこうでありたいものです。ささ、次へ参りましょうか」
次の部屋には水が満ちていた。塩辛い。ひょっとしてこれは、海水だろうか。不思議なことにこの海水は、ドアの境界線から向こう

へは流れていかないようだった。
海のなかでは、たくさんの人魚たちが魚を獲っている。たしかこれは、漁業だったか。こうして自分の目で見るのは初めてだ。
「実際に彼女らがここにいるわけではありませんよ。これは世界の一部を遠くから眺めるための部屋です。なぜこの映像が流れたのかというと――ほら。あなたのおなかのなかに、彼女らの仕事の功績が残っていますよ」
そういって館長さんは、つんつんと、僕のおなかをステッキでつついた。あ。ひょっとして、今朝に焼いて食べた魚のことをいっているんじゃ――。
「ほっほっほ。では、次へいきましょうか」
館長さんに連れられて、さらに奥へと進んでいく――いや、ぐるぐる回りすぎて、ひょっとしたらもう、ほとんど一周してしまったのかもしれない。
「ここが、最後の部屋ですね」
そこは、森のなかだった。
驚いた。室内に森があるのだ。うっそうと茂った森からは、植物特有の華やかな香りが漂ってくるし、鳥の鳴き声すらきこえる。
と、気がついた。部屋の奥に誰かいる。どうやら探検家みたいだ。栄養失調なのか、彼のほほは窪(くぼ)み、痩(や)せこけていた。
彼が右腕につけている時計には見覚えがあった。あれは、たしか……。
ペンギン館長がいう。
「そう、最初の部屋でみた時計です。あれがね、これから彼にとって役に立つんですよ」
探検家は腕時計を空へとかざすと、ゆっくりとその角度を調節していく。ああ、気がつかなかったけれど、どうやらそこは夜のようだ。きれいな星々が……、
なんてことだ。あれは、ついさっき僕が磨いた星じゃないか。
探検家はなにやら満足げな表情を浮かべて、今度は迷うことなく

歩を進めていった。まるで変えるべき家を探し当てたみたいに。
「星と時計で方角を計る……探検家の必須スキルですな。しかし正確な時計と空にかかる星がなければ、彼の命は助からなかったでしょう。ほっほっほ。あなたの仕事、ずいぶんすごいものじゃあありませんか」
いわれるまでもなく、僕の心にぞくぞくした熱が生まれていた。退屈だとばかり思っていた僕の仕事が、だれかの役にたっている……そう考えるだけで、どこか誇らしい気持ちになるのだ。
「おおっと。ちなみにさきほどの人魚たちも、あなたに感謝しているのですよ。いつもきれいな星で海を照らしてくれてありがとう。おかげで魚のいる場所がよくわかりますって」
面映ゆい気持ちになる。僕は、ただ、自分の仕事をしているだけなのに、感謝されているなんて……。
「ぼ、僕だって」
僕は初めて声を出した。
「僕だって、人魚さんたちに、感謝してます。いつもおいしいお魚を食べさせてくれて」
「そうでしょう、そうでしょう」
ペンギン館長の笑顔。
「でしたら、あなたにしかできない仕事……あなたのその器用な人間の手足でしか賄(まかな)えない仕事を、きちんとこなすことです。きれいに磨いた星で世界を照らす――それが、彼女らへの最大の感謝になるのですよ」
いつのまにか、小さな旅は終点にきていたようだ。出口では、羽の生えた小さな妖精たちが出迎えてくれた。
「ありがとう。きみたちが館内をきれいに掃除してくれるおかげで、すごく気持ちのいい時間を過ごせたよ」
僕の口から自然と出た言葉。妖精さんたちは、みな、ひどく赤面して柱の陰に隠れてしまった。
ペンギン館長が手を振りながら、最後に一言だけ付け加えた。

「ちなみにあの探検家も、かつてこの大陸を発見した偉大な人物なのですよ。彼のおかげでここに住めるあなたが、まわりまわって彼を助けるというのも面白い話ですよね」
僕は苦笑しつつ、ふたたび銀色のトロッコに飛び乗った。もう、ここへくるときのような、もやもやした気持ちは吹っ飛んでいた。
のんびりと進むトロッコのなかで、金色の光を浴びながら小人たちの歌声をきく。ここへくるときもきいた歌だ。ひょっとして彼らの仕事は、愉快な歌で人々の心を和ませることだろうか……そう考えていたら、ふいに小人のひとりが声を張りあげた。
「さあ野郎ども、休憩は終わりだ！　はりきってきれいで丈夫な時計を作るぞッ」
「がってんだッ」
いきり立って両腕をあげる彼らの太い腕には、見覚えのある腕時計。僕は思わず吹き出してしまった。
自分の仕事をきっちりこなせば、だれかの助けになり、だれかから感謝される。きっと世界は、そんなふうに回っているに違いない。
僕はこれからなすべき誇れる仕事のことを考えながら、鼻歌交じりに月明かりの帰路をたどった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8382y/

星磨きと博物館

2011年11月24日23時55分発行